

特別引用書解説

書名の上に冠するに、△および×の符號を以てせるは、編者が、その原本を見ざりしものなり。而して、その△を附けたるは、大矢委員の著『假名遣及假名字體沿革史料』によれるもの、また×を附けたるは、同氏が、原本について、別に採集せる材料によれるものなり。かくて、その二つに據れるは冠するに△×を以てせり。

△阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀範

三軸

石山寺の所藏にして、

あた——いし

嘉保二年五月廿五日書了 (上卷、末)
嘉保二年五月廿九日書了 (中卷、末)
嘉保二年十二月五日移點了 (下卷、末)
の識語あり。

醫心方

三〇冊

原本は卷子にして、典藥頭半井氏の所藏なるを、安政年間、勅を奉じて、摸刻せるものなり。卷八の背記に、

天養二年二月以宇治入道太相國本移點

・移點少内記藤原中光比較助教清原定安

移點比較之間、所見及之不審、直講中原師長醫博士丹波知康重成等、相共合醫家本、畢文殿所加之勘物、師長以墨書之、令朱合點、とあれば、此の書の傍訓は、實に、天養二年以前の

ものといふべし。

× 一字頂輪王瑜伽念誦儀軌

東寺の藏。元暦二年三月廿八日、伊勢國度會郡箕曲の宿房にて觀取書寫せる識語あり。

醫略抄

一冊

永保元年、侍醫丹波雅忠の撰するところ、寛政七年に、丹波元簡、おのれの案を附して、原本のままを印刻せり。

色葉字類抄

全體を、いろは順に分ちて語を集めたる字書なるが、本篇に引用せるは、内閣本と十卷本との二種なり。内閣本は、有名なる三卷本の上巻の殘缺一冊に

して、「伊」より「那」の天象部まであり。さて、三卷本の原本は、現時、黒川眞道氏これを秘藏せるが、奥書に、

自天養比至于治承三十餘年、補綴无隙、部類如舊、更加星點、紕繆雖多、愚昧難直、學者每見可摺改之、抑詭貢士有成入道、詞字少少加朱點、爲要文不迷也、件人之學杏壇之風、忽入桑門之日、稽古有勤、其說不信哉、乃爲後見之不審、粗所注付也、内膳典膳橋忠兼撰、とあるを見れば、その平安朝時代の下期のものなること明らかなり。されど、内閣本は影寫にもあらず、假名遣等、はたして原本と一致せるやも知り難ければ、今は時代不明のものとして、之れを掲げたり。次に十卷本は、いはゆる中院家本にして、三卷本を、後世増補せるものなり。本篇は、伴信友の校本

たよれり。卷末に、

伊呂波字類抄全十卷、以今井似閑所傳寫中院家本及三本、參互校訂新寫畢、但是非難辨者用朱傍注其異、雖脫誤無疑者、不敢意改、積月卒業、不日得他本二部、再批校之、比之通本、頗可爲善本者歟、

天保四年六月

伴 信友

と識せり。

因明論疏

二冊

野村素介氏の所藏。上中下の三卷あるべきを、下卷を闕きたり。中卷末尾の識語中に、

始自仁平四年二月十五日至于三月廿四日移點了

釋氏藏俊

久壽二年三月十一日以藏公爲師讀始廿日讀了

字點有誤者改直了

左大臣(花押、賴長とよまる)

とあり。

運歩色葉集

天正本

一冊

東京帝國大學の所藏。いろは順によりて語を集めたる字書なり。天正の寫本。但し、以の部より賀の部までありて、以下を闕きたり。卷尾に、

雖爲惡筆當用之間書寫、丁亥之自中夏寫始、至初秋全部三卷成就、後見之方者、題目一返之御廻向賴入之處無他事、

天正十五年丁亥林鐘十一日申之刻寫畢、實相坊日

詠

と識せり。

桂宮御本萬葉集

一帖

『萬葉集』卷の四の殘零なり。原本は、御物なるを、寫眞印刷版によりて、拜觀するを得たり。なほ御箱書に、

此一軸、芳春院 加賀大納言利家室 年來所持、紀貫

之有自筆奥書、而關白秀次公依御所望入見參之

處、截端與奥書被押手鑑云々、

と識せり。されど、貫之の筆といふについては、專

門家に異論あり。蓋し平安朝時代中期の遺蹟なるこ

とは、疑なかるべし。

× 觀音講式

三千院の所藏にして、永仁六年二月一日の書寫なり。

× 關東武家式目

玉塵

五五册

延德二年十一月五日書寫の識語あり。

帝國圖書館の所藏。卷首に、

永祿六亥二月廿五日資始

卷尾に、

慶長二年八月十日始而十月晦日書寫終功都合五

十五口

と識せり。韻書の順によりて集めたる故事熟語を、

口語にて解釋せるものなるが、卷の二一(七四丁、オ)

「分杯」の注に、

上ニ擲杯トタイテ、又コ、ニ分杯ト別ニタイタ

ソ。同シトソ。上ノ擲杯ノ所ニセウストソ。唐

人ノ物ヲシルスニ、タラヌトアマルト此ヤウナ

ト多ソ。モトカシイソ。ソハツラナトヲスルト

多ソ。

とあるを思ふに、本文は、作詩の爲に、漢人の撰せしものならんか。さて本書の著者が京都五山の僧なることは明らかなれども其の名詳かならず。但し、書中に、

月翁和尚ニ、某童ノ時ニ、尙書ノ文字ヨミヲウケマラシタソ。昧谷ト御ヨミアツタソ。(一九、九丁、オ)

某カ師、齋名ヲ月翁和尚ニコワレタニ、葉巢ツケサシムタソ。(九、五二丁、ウ)

景除エハ、毎日マイリテモノヲタヅネキク二
十年チカウカヨウタソ。十四ノ年カラ三十四マ
テソイマラセタソ。(一八、五七丁、オ)

とあれば、月翁周鏡・瀑巖等紳・景徐周麟に師事せしこと明けし。なほ次の如くいへり。

予が、前に、鹿苑寺院カネタ時、北山テ、楓ノ時分ニ會ヲナイタニ。(五、二〇丁、オ)

某カラウヂ師維馨、人品才學ソナワツタソ。應仁亂前社中衆ナリ。慈照相信重アリ。(二八、一三丁、ウ)

當寺法住院に、興彦龍ト云文カキノ名人アリ。三十六テ死タソ。……某十四歳江ヨリ洛ニ入當寺ニ隸ス。第三忌ニ逢タソ。(四六、四三丁、ウ)

文中、興彦龍とあるは、彦龍周興なるが、その生死の年月不明なれば、著書の生年を算する能はず。されど、永正五年(一一六八)景徐が、その遺著『半陶稿』に序して「余亡友興彦龍」といへれば、それより以前、餘り遠からぬほどに寂せしなるべく、而して、その當時、著者は十二歳の幼童なりしなり。また「某カラウヂ」とあるは、祖父なるべし。維馨

は、應永十年（二〇六三）に生れ、延徳二年（二一五〇）に寂せり。今、上掲の、著者の言を綜合するに、著者は、十四歳近江を出でて洛に上り、相國寺の法住院に侍し、月翁・葉巢子・景徐等に學びしが、終に法住寺に住し、洛北の鹿苑寺を攝せしこともありしなり。

× 俱舍論頌疏

大槻博士の所藏にして、建久六年二月二日書寫の識語あり。

△× 群書治要

四七軸

宮内省の所藏。全部五十卷中、四・十三・廿三の三卷を闕く。もと金澤文庫の書架にありしなり。此の本は北條實時、かつて京師にて書寫し、清原氏をして

校點せしめしが、文永七年十二月、第十五卷以下少々焼失せしかば、康有なる人の、焼失前に寫しおける本によりて、建治二年八月、更に書寫補足したるものの如しとぞ。

華嚴經音義

一冊

此の書は、『華嚴經音義』上下二卷中より、和訓あるもののみを、木村博士の抄出したるなり。原本は、もと徹定和尚の有なりしを、今は西本願寺に藏せりとぞ。その假名遣より推すも、平安朝時代上期以往のものなること明らかなり。

× 花嚴字種性義抄

高山寺の所藏。建久九年九月書寫の識語あり。

× 孝經直解

卷末に、

于時永祿十二己巳年十二月十三日午刻書寫畢
と識せり。

△× 高僧傳

一〇帖

石山寺の所藏。仁平四年・應保二年・長寛元年の識
語ありて、書寫移點の年月、卷によりて異り。大矢
委員の概説にいはいはく、

全部十卷、悉く朱を以て訓點を施せり。讀法極
めて古雅にして、中古以上の文學語法を研究す
るものの参考となるべきもの少からず。

△ 香藥鈔

一軸

伯爵田中光顯氏の所藏。

△ 後漢書

二一冊

永萬元年六月之比於高野山往生院草庵以佛種房
治定本書寫之 勝賢

の識語あり。勝賢は、醍醐寺第十九代の座主なり。

宮内省の所藏。享祿三年六月廿九日、天龍寺本を
以て、加點し了れる識語あり。大矢委員の概説に、
いはく、

此書、全部八十卷、合せて二十一冊となす。元
大徳九年、宋版を覆刻せしものにして、舊徳川
氏駿府文庫本なるよし、御書籍來歴志に見えた
り。

假名字體の古きものあるは、古本中のもの
残れるならん。

古今和歌集

第五秋歌下・第八離別・第十八雜の三帖にして搨本なり。第五は、寛政十一年七月の橘千蔭の跋文を載せ、かつ奥書に、

此集撰者之筆跡之由古來所稱云々、尤爲奇珍者乎、一覽之次聊記之、(花押)

とあり。第八・第十八は翰香堂より出版し、第八の末に、

這古今和歌集第八者、紀貫之眞跡而、毛利家珍藏也、以前寫十八卷、按今本寸緒無異同、誠可爲本朝古書最第一者也、天明七年十月日源尹祥識、

と書せり。貫之の筆といふは信じがたけれど、いづれも平安朝時代のものとせんに、違ふことなかるべし。

御産記部類

一册

内閣文庫にあり。もと和學講談所の藏なり。醍醐天皇、朱雀院、村上天皇、冷泉院、圓融院、花山院、後朱雀院、後冷泉院、後三條院、白河院、二條院、高倉院、安徳天皇の生まれ給へる事に關せる部類記にして、古記録を抄集したるものなり。この本は影寫にして、蠹食をも書きたり。原本は鷹司家のなるべし。摹寫せる印影に「鷹司藏書記」とあり。

△× 古文孝經

一册

本篇に引用せるもの三種あり。その一は、三千院の所藏にして、建治三年八月の識語あり。その二は、上賀茂神社の寶庫にありて、正平十三年十一月の書寫なり。而して、此の書、全卷古字の多きより推すに、三千院本に譲らざる善本なりとは、大矢委員の

いふところなり。その三は、東寺の所藏。文安三年八月の識語あり。本篇に採録するところ、建治本の一部および正平本は、『假名遣及假名字體沿革史料』により、建治本の一部および文安本は、大矢委員が、別に採集せるものによれり。

古文孝經孔氏傳

一冊

弘安の古鈔本を、文政六年十月、阿部正精氏の摹刻せるなり。巻尾に、

弘安二年九月十三日書寫之畢 (花押)

と識せり。但し序文は、原本のもの脱簡し、僅かに二行を存するのみなれば、元亨の校本なるを以て、之れを補足せるなり。さて、その序文の末尾に、次の如く、元亨校本の識語をも刻せり。

元亨元年十一月廿一日資家秘說奉授式部大夫殿

畢

散位清原良枝

△× 古文尚書

正和と文和との古鈔本なり。正和の本は、もと、島原の城主源忠房の藏せしを、貞享元年に豊宮崎文庫に奉納せるもの、卷子にて十三本あり。大矢委員の概説に、

全部十三卷、其中、第四の全卷、第十一の後七分は、後の補寫なりと雖も、他は皆、正和の古鈔本なり。

右の補寫の二卷、及び第七の卷を除く外、每卷本奥云として清原教有の文永、若は正應の奥書を記し、次に、清原長隆の正和云々の奥書を爲せり。こは文永正應の鈔本を、正和に書寫移點

して、生徳才子とある人に授けたるものなるべし。

といへり。長隆の識語は次の如し。

正和第三曆孟夏初五、以家之秘説、授申生徳才子、以十一代之學業終十三卷之詰訓、當時希有者也、明經得業生清原長隆、

本篇は、『假名遣及假名字體沿革史料』および、大矢委員が、別に採集せるものより摘載せり。

次に、文和の古鈔本は、東寺觀智院の藏にして、同じく卷子なれど零本なり。喜久壽丸なる人の識語に、

文和三年七月二日以或家之秘説墨點了

同五日一校畢

とあり。大矢委員が、原本について採集せる材料によりて引用せり。

× 金剛界次第

石山寺の所藏にして、次の如き識語あり。

承暦二年七月六日於石間讀畢 僧深賢

× 金剛界略次第

石山寺の所藏にして、卷末に、

延久三年三月二十六日書寫了

と識せり。

× 金剛頂瑜伽中略出念誦經

東寺の所藏。卷末に、

康平八年二月二十六日點了

と識せり。

△× 金剛般若集驗記

石山寺の所藏。下卷を闕き、上卷中卷、ともに、首尾缺損せりとぞ。此の書、訓點の年代は、大矢委員の概説中に、

此書、書寫年代詳かならずといへども、書體より推すときは、蓋し唐筆ならんか。又傍訓の詞に、助動詞のてにつゞく者の外、他に音便なく、オヲは勿論、アヤ二行のエ音を、正しく分別せるを見れば、必天安以往、天長承和に近きものなるべし。

とあるを以て、ほぼ、これを知ることを得べし。その假名の體に徴するも、平安朝時代上期のものなることは疑ふべからず。

△金光明經

一帖

三井寺法明院の所藏にして、卷首標題下に、

こん

天承二年十一月十一日讀畢（以下虫食）の識語あり。大矢委員の概説にいはいはく。

此本、元古鈔卷子を、其まま木版となししを、後に改装して摺本となせるものの如し。

全卷墨にて傍訓を施し、卷首標題の下に、天承二年の識語あれども、魚食の爲めに明かならず。今假名遣のさま、假名の字體等によりて、之を推せば、能く此年代に適合するを覺ゆるが故に、ここ（一七九二）に序でたるなり。

△×金光明最勝王經

一〇軸

西大寺の所藏。本文は、天平寶字六年に、百濟豊蟲の書寫せるものなるが、訓點については、大矢委員の概説に、

全部十卷、朱と白墨との二點あり。朱點は、第

一一

十卷の奥書にて、年代明か也と雖も、訓の詞多からずして、徴證とするに足らず。白點は、頗る詳密にして、他に多く其比を見ず。惜いかな、此點につきたる識語なきが故に、年代詳かならず。されども、假名の體によりて推すときは、必ず大智度論、天安の訓點の上に序べき者なるは疑ふ可からず。但し、白點中、稀に疎太にして、稍、剝落せるものを見る。其真假名と草假名とのみなるより觀るときは、蓋し弘仁承和に遠からざるものならむ。

とあり。その第十卷の奥書は、朱書にて、

永長二年三月六日辰時點了

と識せり。

金光明最勝王經音義

一冊

卷末に、

承曆三年己未四月十六日抄了、音訓等用借字大底付之、仍只今無清書歟追々引勘字書可一定之、

所入之紙十二紙

と識せり。本篇に引用せるは、影寫の系統本によれるなり。黒川眞道氏所藏の影寫本に、

此書は金光明最勝王經の音註なり。跋文のおもふきにては、今よりは八百年のいにしへ、白河院の御時にあたりて註しけむものなりといふべけれど、筆づかひかつ訓註をおもふに、さばかり古代の筆記ともおぼえず。もし建長のころなどにもやあるらむ。かく心づきて猶くりかへし見るに、跋記の筆意の拙劣なる事、本文とはいたく異なり。いまだ原本をみしにもあらねばうけばりてもいひがたけれど。疑ふらくは後人

のしわざに、本書をひとときはふるめかさむとて、
偽造して副しにはあらしか。具眼の人よく決め
てよかし。ただし此古鈔本は、はやく山川眞清
といへるが秘藏してもたりけるを、さきに、我
友横山由清こひとりて摸寫したるを、ふたたび
かり得て、かく物しつるなり。其後眞清もなく
なりにしかば、その抄本も人手に渡りて、今は
新宮侯の秘庫のうちにあるとぞ。安政七年三月十日黒河春

村識

と附記せり。此の書の年代については、かく先哲の
疑もあれど、その假名遣の上よりいへば、平安朝下
期のものとせんに仔細なしといふべく、また本文と
跋記との筆意を按ずるに、管見にふれたる二三の影
寫本にては、いたく異りとも思はれず。本文の謹直
なるに對し、奥書のやや放縱なる點は、これを認む

れど、同筆ともみらるべき程度なりとす。本篇は、
その識語によりて、しばらく、これを承暦のものと
なし引用することとせり。なほ黒川本には『金光明
最勝王經音註』と題せるを、他本には『金光明最勝
王經音義』とせるがあり。

今昔物語

林家本

二八冊

内閣文庫の所藏。「昌平坂學問所」「林氏藏書」の
捺印ある古寫本にして『今昔物語集』と題せり。

權中納言敦忠集

一帖

原本は、冷泉伯爵の所藏なり。本篇は、その寫眞
印刷版によれり。

沙石集

一〇冊

内閣文庫所藏の古寫本にして、卷の三に、

天文十一年迫月十四日書畢也

卷の四に、

天文十二年三月廿七日書畢

の識語あり。

雜論義

五〇枚

富岡謙藏氏の所藏。論義を集めたるものなり。用

紙は、『法苑珠林章』および『彌勒經述贊』の裏返な

り。蓋し、零本なるべし。而して、『法苑珠林章』な

る第八紙の末に、同筆にて、

件雜論義、爲本書尋見、以長保五年十一月十九

日書了、不可及他見、

と識せり。

×三教指歸

年代不詳の古鈔本にして、醍醐寺の所藏なり。

三經釋

一軸

法隆寺の所藏にして、卷末に、

應安第三曆閏茂年初夏中幹天、於龍田院上草庵、

且爲九品訖生、且爲二利成就、染禿筆贖魚網訖

矣、右筆詣阿

と識せり。

三寶繪

三冊

源爲憲が永觀二年に撰するところ、此の書、下卷

の奥に、

文永十年八月八日彼岸中日未刻書寫了

戸部二千石三善□□

東寺寶泉院本

と見えて、鎌倉時代上期の寫本、現に京都護國寺に藏せり。本篇は、明治四十四年二月史料編纂掛にて影寫せる本によれり。

△史記

四〇冊

宮内省の所藏。第十二卷の末に、

去冬以來、凌老眼染惡筆、使諫議羽林郎公條卿摸點了、所謂舊本者紀傳朱點也、而今爲合易讀、倣江湖之新樣、用朱墨之點云々、

永正辛未孟秋上澣槐陰述虛子

と識せり。大矢委員の概説に、

此本、全部冊冊、舊德川氏駿府文庫本にして、逍遙院三條實隆、元版を影鈔し、其子稱名院公條をして、寫點せしめしものなるよし御書籍來

しき

歷志に見えたり。識語の述虛子は、即ち實隆の號なり。

といへり。

△史記 (孝文本紀)

一軸

狩野亨吉氏の所藏。延久五年に書寫點合せし識語あり。大矢委員、この書についていはく、

此書殘缺一卷、經籍訪古志に、狩谷氏求古樓の藏と爲し、文藝類纂に、柏木正矩藏延久本漢書として、其片假名の別體を出せるものなり。

この本、傍訓、傍註、裏書、共に本文と同筆なり。而して、其傍訓中、オヲの分別正しく、間、草假名を交ふるより考ふれば、其書本の、必ず天曆以上のものなりしことを知る。

と。以てその傍訓の價值をしるべきなり。

史記抄

二〇冊

東京帝國大學の所藏。本書は『史記』の講義録にして、當時の口語を以て記せるもの、著者桃源和尚の自筆本なり。文明九年の識語あり。

字鏡集

寛元本・理性院本

寛元本は、七卷七冊の寫本にして、豎一尺一寸、横七寸五分の大本なり。卷末に識して、

寛元三年四月二日小川法印承澄示云、朱點東宮切韻、墨點唐玉篇也、自支脂至于灰哈又舌内也、

寛元三年五月十日尙成云、墨點不審字也、朱點詳之無不審字也、

といへり。されど、東京帝國大學・帝國圖書館に藏せる復寫本を見るに、奥書にいへるが如き朱墨の二

點なし。蓋し、書寫の際その煩を厭ひて除きしものなるべし。いま、大學本・圖書館本を検するに、古假名を所々に書き交へたると、その紙質・書風、およびその製本の大形なるとより推すに、影寫の系統本なること疑なし。されど復寫の際の疎漏と認めらるる點なきにあらざれば、寛元のものとして引用せんこといかなれば、時代不明のものとして、之れを掲げたり。

理性院本は、二十卷四冊の寫本にして、帝國圖書館の藏。「溫故堂文庫」「和學講談所」の朱印を捺し、卷末に、

字鏡集廿冊了

醍醐理性院

右字鏡集廿卷以醍醐理性院本書寫畢

享和二年正月

檢校保己一

と識せり。即ち理性院の藏本を塙檢校の書寫せるも

のなり。但し、影寫にはあらざるが如し。

寛元本・理性院本ともに、漢字の偏傍を分類し、それによりて漢字をあつめ、その字の音および訓を附したり。されど、偏傍の順序ややことに、その分類、寛元本は、理性院本よりもやや細かなり。而して漢字の配列、各字に注したる訓の順序等も彼此大いに異り。また、彼の本になき訓の、此の本にあるあり。此の本には注したる音の彼の本には缺けたるあり。かく相違の點少からずといへども、其のもとは一なること論なく、かの寛元本の奥書に見ゆる朱墨の兩點にやと思はるるものをも、此の理性院本に認めらるるなり。そは漢字の左側下に、「○」もしくは「●」を附けたるにあり。按ずるに、理性院本は『國語學書目解題』にあげたる應永本と、その偏傍の順序全く一致したれば、同じものなるべし。但し理性院本

には、應永本の如く「爲長卿作」の識語なく、また「四聲綱目」を載せず。斯くて、應永本・理性院本の系統に屬するものが、原本にして、寛元本は其を改定せしにはあらしか。偏傍の分類が、理性院本に比して、寛元本の方やや細かなるのみならず、理性院本は、寛元本よりも、古假名を用ゐたること多く、理性院本に古體なるを、寛元本に普通體にせるものさへ往々あればなり。

かく、寛元本が、後に更めたるかの形迹ありと思ふ上は、これをおきて、理性院本を採るべきに、本篇が、専ら寛元本を引用せる所以は、理性院本の書寫が、極めて粗雜なるのみならず、その原本寫成の年代明らかならざるに反し、寛元本は、上に述べたるが如く、影寫本なるのみならず、原本は、寛元のものなること明らかならざればなり。

詞顯抄

一冊

東京帝國大學の所藏。歌詞の解釋を書き集めたり。撰者詳かならず。卷末に、

天文廿四年六月九日

高屋但馬守主康尙(花押)

と識せり。

△四種相違斷纂私記

一冊

興福寺の所藏。『因明義斷略記』と『因明闕後二相纂略記』との二書を合はせたるを以て、この名あり。天祿二年、興福寺の沙門眞興、これを撰す。寛弘七年に書寫せし識語あり。

侍中群要

丹鶴叢書本

四冊

嘉元四年に、水谷大藏大輔清有の本を以て書寫校合せる識語、每卷末にあり。原本は、松岡明義の藏せしなり。その著者については、伴信友の説、『應聲考』に出でれば、次に掲ぐべし。

此書の文中を案ふるに、延久より後の世に、藏人の要務を集記せるもの也。然るを、卷首に「寛平二年左大辨橘廣相奉勅作之」と題せるは、本文の發端に「藏人式云」とある、本文の旁注なるを、本書の題名とこころえひがめたる物也。書籍目錄に「藏人式一卷橘廣相撰」と見えたるをもて知べし。

上宮太子傳記原本

一冊

法隆寺の所藏。卷末に、

文明十九年丁未中夏天書之同一校畢

と識せり。

愚筆禪阿

聖徳太子讚歎式

一軸

法隆寺の所藏にして、卷尾に、

于時享祿三年庚寅仲夏天、良憲難去依御所望、雖

麓毫憚多、偏本願値遇結縁一分而染筆畢、

右筆印圓

誰なりとをくれ先たつほとあらはかたみにしの

へ水莖のあと

傳隆尊

と識せり。

聖徳太子平氏傳雜勘文

六冊

法隆寺の所藏。卷末に、

正和三年二月十八日金剛佛子法空

と識せり。

勝鬘經御齋會表白

一軸

法隆寺の所藏。識語なきを以て、書寫の年代明ら

かならざれど、室町時代のものなることは疑なかる

べし。

△成唯識論

一〇帖

石山寺の所藏。各卷末の識語によりて、此の書の

本文は、第一卷の外すべて、天平廿年に僧惠勝の書

寫せるもの、而して全部の訓點は、寛仁四年、本書

讀了者の施せるものなること疑なく、その第一卷は

同人の書寫補足せしものなるべしと大矢委員いへ

り。

× 順次往生講式

智恩院の所藏にして、奥に、

文治二年六月二日書寫 信玄

と識せり。

× 順次往生講式裏書

前なる『順次往生講式』の本文と同じく、信玄の筆なり。

△× 春秋經傳集解

三〇軸

宮内省の所藏なり。大矢委員の概説に、

此本、清家に傳來せるを、保延以後追々校合して、建長中、教隆、北條實時に之を授け、弘安嘉元の間、俊隆直隆等、焼失したる諸卷を補寫などして、北條顯時に授けたるなり。

とあり。以て、その訓點の價值を知るべし。每卷の首尾に「金澤文庫」の捺印ありとぞ。

新撰字鏡

天治本

一二冊

『新撰字鏡』は、昌泰年中、釋昌住の撰にして、本邦現存の字書中、最古のものなること人のよく知るところなり。天治本は、天治元年の書寫にして、もと法隆寺の所藏なりしを、今は帝國博物館の有に歸せり。本篇は、その影寫本によりて採録せり。

此の書、天治本のほかに、享和三年の刊本及び羣書類従本ありて、普く世に行はれたり。されど、此は和訓を附したるもののみを抄出したるにて全部にあらず。かつ天治本の和訓あるものと比するに、其數少きのみならず、異同も多ければ、その抄出せし原本は、天治本と別種のものなるが如し。さては、

天治本を以て著者の原本のままと断定すること能はざるは勿論にして、その中には、明らかに後人の筆と認むべき訓さへ一二なきにはあらざるなり。されど、今は、天治の完本をおきて、原本不明なる抄本を採るべきにあらざれば、主として天治本を引用することとなし、かつ、内容の大體において、著者の原本と大差なかるべきこと、識者の、一般に認むるところなれば、平安朝時代上期のものとして、これを取扱ふこととせり

新撰類聚往來

三冊

慶安元年の刊本なり。著者を丹峰和尚といふ。傳明らかならざれど、卷尾に、「正覺國師第四世佛陀院」とあり。正覺國師は、疎石なれば、これによりて推すに、應永前後の禪僧なるべし。さて、此の書の傍

訓が、著者原本のままなるか否やは知るを得ざれど、本文は、原本のままなるべしと思ひて引用せるなり。

深窓秘抄

一軸

藤原公任の撰するところ、古今の詠百首を選びて類聚したるものなり。此の書は、天保十年に、吉田敏成の摹刻せるにて、原本は、著者の手書といひ傳へたれど疑はし。蓋し、その筆致を味ふに、平安朝のものなるべし。

×性靈集

醍醐寺の藏。寶治元年十一月四日に、敦周移點の識語ある古鈔本なり。

節用集

易林本

一册

易林といふ人の校正するところ、慶長二年の刊本なり。

節用集

大槻本

一册

大槻博士の所藏。用紙は烏子、製本は粘葉。奥書に、

此書、往歲於西備福山市上骨董舖購之、節用集有數本、世以饅頭屋本爲最古、而此本則迨出其右、如鶯宿梅馬醉木毒掠之類、他書所未言者往々而有、蓋成于釋氏之手者也、凡以以呂波爲之部分者、以此爲蒿矢、

末尾、載京都地名、前有目錄、自伊呂波至世須京、今俗間幼童筆學、先授以伊呂波至世須京者、蓋循用此目錄也、

明治丙子秋日書於玉池之凝翠軒古稀老人枳園とあり。饅頭屋本よりも語數多く、而して兩者一致の點少からず。

節用集

饅頭屋本

一册

半截横綴の刊本なり。此の書は黒川春村の『節用集考』によるに、南都の饅頭屋宗二が、父林逸および舟橋環翠軒等先人の業をつぎて、從來の『節用集』に、更に、修補を加へたるものなり。

節用集

天正本

二册

東京帝國大學の藏。卷末に、

右此板木者、泉州大鳥郡堺南庄石屋町經師屋有是、石部了冊

于時天正十八年庚寅履端吉辰

とあり。饅頭屋本を増補せるものの如し。

× 千金方

今泉雄作氏の所藏にして、卷末に、

天正三年三月二日一見了

と識せり。

× 莊子雜篇

高山寺の所藏にして、嘉元元年九月廿五日の識語あり。

× 續遍照發揮性靈集補闕抄

高野山金剛三昧院の所藏にして、

承暦三年立冬上旬書寫 教遍

の識語あり。

△× 蘇悉地羯羅經略疏

四軸

石山寺の所藏なり。大矢委員の概説にいはく、

此書は、釋圓仁(慈覺大師)齋衡元年の撰にして、全部七卷なるを、今、石山寺、第二、第五、第七、及び、首尾缺損して、卷次明かならざるもの、併せて四卷を藏す。而して、二と七との卷は、寛平の書寫、訓點にして、其他は、石山寺惇祐座主補足訓點せしものの如し。何となれば、第五其他の訓點は、全く惇祐のものなること、假名字體によりて證せらるるに、其第二卷と同點なる第七卷の末に、讀法を惇祐に授かりし由の識語あればなり。

と。されば、卷の二、七が、寛平のものなることは、明らかなり。其他は、石山寺第三座主の訓點なるべけれど、その年代、識語なきを以て知ること能は

ず。しばらく、讀法を授かりし天曆五年のものとして、本篇に引用したり。さて卷中に、識語二つあり。

一は、第二卷の末に、

寛平八年歲次丙辰夏三月、謹依傳法阿闍梨仰、
與基安禪師、始尋首尾、今日功畢、然大師草創
下筆以後、雖累多年、未有講受之者、始於今日
而傳受之、後代學者宜悉之耳、六月廿一日摠持
院僧憐昭記、

二は、惇祐内供に讀法を授かりしといふ識語にて、
第七卷の末に、

天曆五年六月廿日、候石山内供奉十禪者御房、
授覺既畢、

とあり。

索性集

一帖

原本は、冷泉伯爵の所藏。本篇は、寫眞印刷版によれり。平安朝時代の遺墨なること疑なきなり。

△蘇摩呼童子請問經

二軸

石山寺の所藏。沙門朗寵が、平治元年、他本と比較し移點せし識語あり。而して、大矢委員は、その假名の字體の古さが交れるより推して、「恐くは、天曆以上の古本より移點せしによるなるべし」といへり。以て、その傍訓の古きを知るべきなり。

△×大慈恩寺三藏法師傳

一〇册

興福寺の所藏。本文は延久三年の書寫にして、訓點は、第一より第八までは、永久四年、第九第十は、承徳三年に附けたるものなること、識語によりて知らる。全部、筆者一ならず。悉く朱墨二點を施せりと

ぞ。

太子傳玉林抄

八冊

法隆寺の所藏。『平氏太子傳』の註なり。撰者は詳かならず。卷數十九あり。毎卷、尊美法師書寫の識語あり。長享元年より、延徳二年に至りて書寫の功を竣れり。

△× 大智度論

一〇〇帖

石山寺の所藏。毎卷末に、大抵、

天平歳次甲戌十一月廿三日寫播磨國賀茂郡既多寺

の識語あり。また第五十卷表紙裏に、白墨にて、

天安二年山階寺傳大詮大徳所講

と識せりとぞ。なほ、大矢委員の概説あれば、之を掲

たい

ぐべし。

毎卷末、大抵、既多寺の識語、及び納經者の姓名を記せり。但、稀に上野國佐位郡教證持經天長二年云々などあるも交れるは、既多寺の舊藏を、後に、他より補足せしならん。

全部、白墨にて訓點傍註を施し、同じ白墨にて、第五十の表紙裡に、天安二年の識語あり。今傍訓等の運筆の放縱なるより推せば、講師の口授に隨ひて、匆々に記入せしものにして、其假名遣の如きは、皆當時の口發のまゝなるべし。……

△× 大唐西域記

一二帖

石山寺の所藏。長寛元年移點の識語あり。大矢委員の概説に、

全部十二卷、第九以下は寶徳年間の補足にして

二五

無點なりといへども、其他は悉く朱を以て點を

加へ、墨を以て傍訓を施せり

と記せり。

大唐三藏玄奘法師表啓

一冊

知恩院の所藏。本篇は、その寫眞版によれるなり。

『假名遣及假名字體沿革史料』の概説によるに、此の

書は、天平神護元年書寫の華嚴八會剛目章の裏に記

せるにて、徹定和尚の舊藏なり。書寫の年代は不明な

れど、假名の古體なるより推すに、平安朝時代上期の

ものなること疑なし。

大塔物語

一冊

一名を『大塔軍記』ともいふ。應永七年九月二十四

日、信州更科郡布施郷における合戦の始末を記せり。

此の書は、古寫本の摸刻にして、奥に、

文正元年丙戌應鐘上旬、諏方上社栗林五日市庭

閑室而寫之、文字可多誤候、後見憚入候者也、

堯深法師七十一才吉モ惡モ後代之形見也、念佛一

返所望也、

とあり。此の書の原本が、堯深の自筆のものなりや

否やは明らかならず。されど、當時のものとなせんに、

仔細なき字體書風といふべし。

大般若經音義

一冊

原本は、名古屋真福寺の所藏にして、上下二卷あ

り。各卷末に、

奉寄進尾州真福寺願主濃州花王院宥賢

慶安三年九月七日

と識せり。本篇は、塙保己一が、原本を謄寫せるに

據れり。

× 大般涅槃經

石山寺の所藏。卷尾に、

治承四年七月十八日於石山寺重比校了 朗澄
と識せり。

× 大毘盧遮那經義釋

石山寺の所藏にして、

安元元年十二月八日書寫
の識語あり。

△ 大毗盧遮那成佛經

七軸

西大寺の所藏。本文は、天平神護二年十月、吉備
由利の書寫にして、承暦二年九月、釋寬經の訓點あ

り。

× 大毗盧遮那成佛經疏

醍醐寺の所藏にして、卷尾に、

建保五年初夏比移點之 深賢
の識語あり。

× 大毗盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏菩提幢
標熾普通眞言藏成就瑜加

石山寺の所藏。長久二年・延久四年・承暦三年の識
語あり。されど、假名の字體より推すに、恐らくは
長久二年の訓點なるべしと、大矢委員いへり。

× 太平記

近衛公爵家の所藏。永正二年五月二十二日の書寫

なり。

大明律例諺解

一六冊

帝國圖書館所藏の貴重本なり。著者は、榊原玄甫にして、正徳三年七月の撰。寫本なり。

孝亮宿禰日記

一二冊

内閣文庫の所藏にして、小槻孝亮が日記を、元祿三年に拔萃せるもの、文祿四年十一月十七日より寛永十一年十二月廿九日に至れり。但し原本にはあらざるなり。

塵袋

一一冊

撰者不詳。書中、任那のことをいへる條に「今、蒙古ニセメトラル。イト心ウキヨノスエノアリサマ

也」とあるによれば、弘安・文永の交に書きしものなるべしといふ。世に普く行はるる『塵添壺囊鈔』は、行譽の『壺囊鈔』に、此の『塵袋』の説を擇びて添加したるものなり。

此の書の原本は、高野山無量光院の所藏にして、永正五年、同院の住、印融の書寫せるものなり。本篇は、原本を、天保十五年に、名古屋なる神谷克楨の寫せるを、安政二年に、黒河春村の復寫し、更に堀某の寫成せし本(南葵文庫にあり)によれり。かくて、天保以後の書寫はいづれも影寫なり。

擲金抄

二冊

内閣文庫の所藏。もと上中下三本なるを、上巻を闕き、中巻また全からず。下巻の終に、

弘安元年_{戊寅}六月十四日令書寫畢

と識せり。原本は、名古屋眞福寺の所藏なり。その書風・字體・紙質等の古きと、蠹食を寫したるとより推すに、原本を影寫せしか、然らざるも影寫の系統本なること明らかなり。

この書著者詳かならず。「神仙」以下數部門をたてて、作詩に便せんがためなるべし。古き語句を集め、和漢の作例をもあげたり。鎌倉時代の撰なるべし。

傳屍病二十五方

此の書は、『續羣書類從』に収めたるものの原本なるべし。現に、帝國圖書館の所藏なる『輪池叢書外集』卷の十一の中に埋れあるを、山田補助委員の發見せしなり。卷末に、

干時建武元年十月七日於讚州香東郡野原書寫了

大傳法院我寶 生年 三十五

てん——とら

と識せり。その書風筆勢を按ずるに、蓋し當時のものなるべし。假に、後世の書寫となすも、卷中蠹食を書せると、その筆致の古くして、勢あるとより推すに、原本のままを、巧に臨寫せるものなること疑なきなり。

天台六拾卷音義

四册

帝國圖書館の所藏にして、伴信友の手澤本なり。一名を『難字記』といひ、承應二年正月の刊行なり。此の書は天台六十卷をはじめ、その他の訓を多く集めて、漢字の下に注せるが、古體の假名も、所々に散見せり。

東大寺戒壇院神名帳

一册

奥に、

文明十一年己亥正月日

爲且興隆、爲且祈禱、勸諸人、令新調之、所寄附也、

維那 良津

右筆 叡義

と識せり。但し本篇は、その復寫本によれるにて、その奥書は次の如し。

右東大寺、戒壇院神名帳一冊、原本爲横披一軸、卷首有印文、藤原以文所珍藏也、余頃日在京師、偶觀之以文家、即請借手寫、卦略字形略、隨舊觀、且跋語四行以原本臨寫云、

文化六年己巳八月十一日 源吉從記

同年九月十六日雇人令臨寫他日一校了

于時在于平安二條堀川官舎

伴信友(花押)

童蒙頌韻 靈雲院本

一冊

上下二卷を一本とせり。原本は靈雲院朴心禪師の藏にて、古寫本なるを、明治三十四年、原本のままに印刷せるなり。そもそも『童蒙頌韻』は『羣書類』に收めたる外、内閣文庫にも一本を藏し、奥書に、

元祿壬申冬佐々宗淳獲之京師寫

とあり。されど、下卷の書寫疎漏多し。いま三本を比較するに、靈雲院本の勝れるを認む。かつ、書寫の年代明らかならざれども、筆致古色ありて、假名の字體にも古きもの多ければ、此の本を採ることとせり。

△× 日本書紀

一六軸

熱田神宮の所藏。卷末に識して、

金蓮寺四代

寄進

南無阿彌陀佛

永和二年六月一日

とあり。

日本書紀

丹鶴業書本

二冊

神代卷上下二卷にして、嘉元四年書寫の識語あり。

此の書は、紀伊新宮の領主水野忠央が、原本のまよを、忠實に印刻せるものなること人の知れるが如し。然れども、傳本世に稀なるを、近時、國書刊行會にて縮刷したれば、世に布くこととなりたり。

日本書紀私記

藤波家本

一冊

内閣文庫の所藏。豎二尺餘、横七寸の大本にして、

次の如き奥書あり。

右日本紀私記、以藤波家本影寫焉、原本卷子爲

三卷、今爲葉子合壹冊、

教部省考證課

さて別に、『日本書紀私記』一冊ありて、世に行は

る。初に神代卷の私記を載せ、その末に、

于時應永三十五年同二月廿二日ニ朱點一校了(朱書)正月十五日午時、上中下三

卷終ニ寫功了、上卷者日本紀三十卷四十一代持

統天皇マデノ註也、中下二卷者神代兩卷ノ註者

也於此本一者、平野神主之家ヨリ外ニ他家不可

有本也、可秘々々云々、

髮長吉叟生年八十一歳

元祿十五年壬午春正月、正訛謬一修補脱闕

畢、今一卷滅却不傳、尙可需諸四方也、

墨江後學愚直堂書

と識せり。これいはゆる應永本と稱するものなり。而して、更に、神武天皇紀より應神天皇紀に至るまでの私記を添付せり。その巻尾には、

予觀^{ルニ}此書^ニ實古製也^{ナリ}、及^テ傳寫久^ニ文字轉倒^ス、又往々多^シ錯謬[、]仍今正^ス之蓋因^ニ二三子請^ニ也、

元祿壬午春正月 墨江神學生愚直堂書

とあり。されば、此の私記は、應永本の殘缺と、新に得しところの、神武天皇紀以下の私記とを、元祿十五年に、愚直堂の集めたるものなり。今これを藤波家本に對比するに、藤波家本の第二の巻は、應永本の一部なる神代巻の私記と全く同一にして、その第三の巻は、愚直堂が、新に發見せし神武天皇紀以下の私記に當れり。而してその第一の巻は、彼の髮長吉叟が奥書に、「上卷者日本紀三十卷四十一代持統天

皇マデノ註也」といへると同じものなるが如し。その故は、藤波家本の第一の巻は、「日本紀目錄」といふ題下に、六國史の名をあげ、撰者などを記し、次に『弘仁私記』の序の全文を載せ、次に「日本紀私記今案依養老五年私記作之」と題して、『日本紀』の全體に互れる訓を載せたればなり。果して然らば、藤波家本は、應永の完本に合はすに、神武天皇紀以下の私記を以てせるものなり。

さて藤波家本を通覽するに、その第一巻は、片假名を以て、本文の右傍に訓したるが、まゝ眞假名を用ゐたる所もあり。或は、もとは、すべて眞假名なりしを、後人の書き改めたるにか。その第二巻は、すべて眞假名を以て、その訓を、本文の下に注せり。その第三巻は、眞假名を本文の下に注したる所と、傍に訓せる所とあり。而して、第二第三の巻には、

朱を以て、四聲濁點を附したるが、第一卷にも所々に點したり。かくて、その第一卷が、他とその撰の一ならざるは勿論なるが、第二第三も、その體裁よりいふ時は、別種のものなるが如し。猶、三卷ともに、その訓に、いかがはしきものあると、假名遣の亂れたるとより推すに、平安朝時代下期以來のものと思はる。『本朝書籍目録』に「日本紀私記三卷」とあるは、此の私記のことなるべきか。さて、此の本、第二第三の卷には識語なし。第一の卷末には

時也閣茂之歲功曹之候、白霜埋瓦寒嵐過窓、于茲云老骨云病眼、雖懶微細之事、強遂警校之功者也、爲後代備證本歟、凡此書者日本第一之秘書也、無左右難感得者也、慮外寫得天之與之歟、神之授之歟、喜悅無限、万悦千幸く、

入宋落魄隱士守方在判

と識せり。守方とは、誰れなるか、明らかならず。本篇、別に「安倍本」を引用せり。此の書は、原本を見しにあらず。帝國圖書館所藏の貴重本に『日本書紀私記』一冊ありて、よく異本と比較し、伴信友の書入もあり。その中に、安倍氏の傳本との異同をも旁書したり。それによれるなり。

年中行事

大炊御門本

一冊

此の書は、速水房常が、大炊御門家の本を書寫せるにて、識語によるに、その初、中原師光が、寛元元年九月に抄寫せるもの、所謂師光年中行事なり。

△白氏文集

二七軸

田中勘兵衛氏の所藏。もと金澤文庫のものなり。卷によりて、書寫訓點に新古あるが、最も新しきを、

建長四年の移點とす。

×佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌

東寺の所藏。「承暦三年十二月十一日於禪林寺奉受點了」の識語あり。

文鳳抄

三冊

内閣文庫の藏。「本朝書籍目録」によるに、菅原爲長の撰するところなり。一に『秘抄』ともいひしにか、各巻の目録の初には、然か題せり。此の書、巻末の識語によるに、弘安元年五月の書寫なり。原本は名古屋眞福寺の所藏なり。書寫の年月は詳かならざれど、その書風・字體等を按ずるに、原本のそのまゝを傳へたるものなり。蠹食を寫せるところもあり。

平家物語

延慶本

一二冊

此の書、十巻より成れるが、巻一より巻九までは、部門を立てて、故事熟語等の解釋出典をのせ、巻十には、同韻の漢字と同訓平他字とをあげて、各字、音訓を附けたり但し巻四・巻七を闕き、巻の一・二ともに全からず。

松井簡治氏の所藏。此の書は、延慶二年及び三年に、釋榮嚴が書寫せる原本によりて、應永二十六年に、釋融憲の寫ししを、文政十三年に復寫したるものなり。而して文政の書寫は、應永本の影寫、應永の書寫は、延慶本の摸寫、延慶の書寫は、原本の摸寫なること、『平家物語考』に詳かなり。されば此の書の假名遣、實は、延慶以前のものにかかれど、今は、榮嚴が書寫せる延慶二年のものとして引用し

たり。

平治物語繪詞

三軸

平治の亂を寫せる繪卷物にして、繪は住吉慶恩、詞書は藤原家隆なりと傳ふ。原本の今に傳はれるは三卷にして、一卷は、米國ボストン博物館に、他は、伯爵松平直亮・岩崎小彌太の兩氏、これを藏せり。本篇は、考古學會にて、原本および摸本を縮寫し印刷せしものによれり。

篇目次第

一一册

内閣文庫の所藏。偏傍によりて漢字を集め、音訓を附したる字書なるが、下卷は缺本なり。「溫故堂文庫」「和學講談所」等の印を捺せり。此の書、その撰者を知らず。又書寫の年月も詳かならざれど、慶

長以後の筆ならざることは、字體書風によりても明らかなり。その書名については、『國語學書目解題』に説あり。ついで見るべし。

△法苑珠林

一册

法隆寺の所藏。卷末に、長承三年甲寅五月二日法隆寺於解脱房書之と識せり。

×法苑林章

法隆寺の所藏にして、久安六年六月十八日於興福寺移點了晴秀の識語、卷末にあり。

法隆寺緣起白拍子

一軸

法隆寺の所藏。奥書に「貞治三年八月九日書之」とあり。

法隆寺佛像記

一冊

法隆寺の所藏。卷末に、

寛正伍年甲申九月十八日

覺心法師

相傳

□□判

と識せり。

法華音義

三冊

書寫山の住僧快倫が、慶長十八年三月に撰せるにて、刊本なり。

△法華義疏

三軸

石山寺の所藏。薬師寺の住僧注算が長保四年の識語あり。大矢委員の概説に、

譬喩品初巻の首尾、各、少許りのところ、白墨の訓點ある上に、再び朱點を施せるものある外、全部大抵朱を以て訓點したり。而して其訓點は、全く識語と同筆同色なれば、其中なる假名遣等は確かに長保年代の實況を示せるものといふべし。

と見えたり。

△法華文句

一軸

故高嶺秀夫氏の所藏。大矢委員の概説あり。次に掲ぐべし。

全部元二十卷あるべし。書體は、天平時代を

少しく降れる程のものにして、首より半過ぐる
までは、行筆稍謹嚴なりと雖も、末尾に近くに
随ひ、漸く籠略となりて、暗に根氣已に竭きて、
書寫他卷に及ばざりしを示せり。……………

全卷、白墨赭墨及び朱の三次の訓點あり。赭
墨、白墨の上に重り、朱點、間、赭點を避けて記入
せるところあり。以て白點は最も先に、赭點之
れに次ぎ、朱點は最も後に施せるものなること
明かなり。而して、假名の體の、三者相類似せ
るより推せば、略、同時代の人の手になれる事、
疑ふ可からず。但し其時代は、真假名の多きと、
テの假名に互を用ゐたるなどより考ふるとき
は、略、推測することを得べし。

△本朝文粹

ほん——まさ

眞福寺の所藏にして、奥に、
建保五年六月八日 貞圓
と識せり。

將門記

一冊

原本は、名古屋市眞福寺の所藏にして、卷子なり。
本篇は、天明年間、稻葉通邦の影寫せるを梓行せる
刻本によれり。卷末に、

承德三年正月二十九日於大智房酉時許書了

同年二月十日未時讀了

と識せるが、その訓點については、大矢委員次の如
くいへり。

其訓點は讀了と書ける時に施せるものなるこ
と、識語の墨色と、退筆にてかける筆意の同じ
きとによりて證す可し。

萬葉集 元曆本

三冊

刊本なり。原本十四冊は、古河虎之助所藏せり。その奥書に、

元曆元年六月九日以或本校合了

右近衛權少將(花押)

とあるを以て、世に元曆本と稱せるが、筆者は明らかならず。さて寛政享和の交、此の原本を、神戸の俵屋久左衛門所持せしを、塙保己二影寫せしが、その男忠實に至りて、第一・第二・第七の三卷を摸刻せり。これ即ち刊本三冊なり。

△妙法蓮華經玄贊

一〇帖

法隆寺の所藏。同寺の僧覺印が、保安三年四月に書寫し、同年十月に移點せるものなり。

×妙法蓮華經提婆達多品

八軸

高野山龍光院の所藏。第二第八の卷末に、釋明算の識語あり。明算は、龍光院中興の僧、紀元一七〇〇年頃の人なり。此の書、本文は天平時代の古寫本なるが、點者は明算なること、同人訓點の識語ある『大毗盧遮那成佛經』の點と同筆なるによりて明らかなりと、大矢委員いへり。

△遊仙窟

一軸

醍醐寺三寶院の所藏。正安二年の古鈔本を、僧宗算が、康永三年十月十六日に摸寫せるものなり。なほ、本篇、別に「慶安本」として引けるは、慶安五年の刊本にして、文章生英房が文保三年の序文あるものなり。

略韻

一冊

帝國圖書館の所藏にして、上下二卷より成る。卷末に、

弘安二年卯四月寫畢

と識せり。原本にはあらざるべけれど、近世の筆意とは見えず。上聲の字を集め、その右方に唐音を、その左方に漢音を附し、ままた訓をも注したり。

△× 類聚三代格

一軸

東寺觀智院の所藏。卷末に、

文永五年四月十八日申請大判事殿章職本一校畢

法曹末學彈正忠中原職宗(花押)

本云貞應三年八月二十一日以判官殿御本令點

畢依挑他人定有訛謬 在判

と識せり。

類聚名義抄

觀智院本

一一冊

此の書は、建長三年、釋顯慶の寫すところにして、東寺觀智院の所藏なり。而して、その原本は、著者自筆の草本によりて、仁治二年、釋慈念の書寫せるものなること奥書に見えたり。本篇は、東京帝國大學所藏の影寫本によれり。

朗詠要集

森晉太郎氏の所藏。本篇は、『和漢朗詠集 公民文庫

本』の卷首なる寫真版によれり。卷末に、

已上、詠數六十七首、博士口傳悉奉授于琳弘教

禪房了、輒更不可有披露候也、先達等被祕故也、

又三首奉授者也、

正應五年三月日聖玄(花押)
の識語あり。

朗詠要抄

一軸

内閣文庫の所藏。卷尾に、

本云

文永二年^{丑乙}十一月十一日祕事朗詠悉以奉傳豪
愉大德畢、

桑門心空在判

延慶二年^{己酉}八月十三日、朗詠祕事不殘一曲、悉
以奉傳普一大德畢、因空(花押)
と識せり。その墨色、字體運筆等に見るも、延慶のも
のなること疑なし。

△老子道德經

一冊

大槻博士の所藏。上下二卷を合冊せるものなり。
卷末に、

于時天正六^寅年孟夏下旬寫之關東下野州足利之内學校下

真瑞

の識語あり。

△×六臣註文選

六一冊

宮内省の所藏。應永廿九・卅二・卅四年に寫點の識
語あり。大矢委員の概説に、

『羣書治要』『春秋集傳』等と同じく、紅葉山文
庫の舊藏にして、大字、關本楮墨並びに完好、
實に、宋版中の尤物なり。

といへり。

△×論語義疏

五冊

大槻博士の所藏。卷末の識語によるに、文明十九年八月十八日、龍安院周篤の書寫せるものなり。

× 論語集解

一〇帖

宮内省の所藏。此の書は、その識語によるに、仁治三年書寫加點の清原家傳本を、嘉曆二年より五年に互りて、釋禪澄の書寫せるものなり。

倭漢朗詠集

一〇冊

もと近衛家の所藏なりしを、今は御物となれり。かつ原本は、粘葉綴の小本にして二冊なるを、引き延して、寫眞印刷版とせり。筆者は、藤原行成と傳へたり。

倭玉篇

三冊

慶長十五年二月の刊本なり。

和名傳鈔

一冊

寫本なり。一名を『本草類編』また『康賴本草』といふ。然れども、此の書が、康賴時代の撰ならざることとは明らかなり。かかる偽書を、本篇に採用せるは、一本に、苟愚舎なる人の、明德元年書寫の識語あるにより、それ以後の作ならざることを知るるを以て、當時の假名の證として、引用の必要ありたればなり。

特別引用書解説終

刑律

三例

凡有... 刑律... 刑律... 刑律...

刑律

一〇例

凡有... 刑律... 刑律... 刑律...

刑律

一〇例

凡有... 刑律... 刑律... 刑律...

律例

一〇例

凡有... 律例... 律例... 律例...

律例

一〇例

凡有... 律例... 律例... 律例...

疑問假名遣後篇正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
八			七行ノ次ニ「アイタル」ノ一行ヲ加フ	二七五	八	オドシモ	オドシモ	五四七			五行ノ次ニ「室町時代」ノ一行ヲ加フ
二二	一四	和名阿布比	上欄ノ數字ヲ「玉塵」ノ上ニ移ス	三一八	七	なほ多し	なほ多し	五五三	八	は、別の意	は、その初、別の意
二六	七	和名阿布比	和名阿布比	三三〇	七	終始者	終始者	五五九	一	「いたわし」	「なげかわし」
二六	八・九	和名加良阿布比	和名加良阿布比	三三七	五	終始者	終始者	五八四	八	檀、蘇方、陶砂	檀、蘇方、陶砂
二七	六・七	あふひ	あふひ	三四五	一	とあれば	とあれば	五九八	一〇	鳥飛	鳥飛
二七	一	煮葵汁	煮葵汁	三五二	八	此鳥	此鳥	六一四	四	ハイル	ハイル
三八	二	叡感之餘	叡感之餘	三六〇		三行ノ次ニ「鎌倉時代下期以前」ノ一行ヲ加フ	鎌倉時代下期以前	六三二	一〇	時代不明	鎌倉時代下期以前
四八	二	壹岐	壹岐	三六四	一四	ザ・ダ	ザ・ダ	六三九	一	雷兩	雷兩
五三	六	ヨントコロ	ヨントコロ	四一四	一	不明	不明	六四九	五	元朝榜	元朝榜
七七	一	御勢乃	御勢乃	四二二	二	澤瀉	澤瀉	六五八			
八九	一	逆	逆	四二二	一	蹴	蹴	六七三			
一〇〇	九	孩	孩	四二四	一〇	蹴	蹴				
一〇三	一	三六十萬	六十萬	四二九	二	澤瀉	澤瀉				
一三五	五	裏みて	裏みて	四二九	二	澤瀉	澤瀉				
一七二	九	初	初	四二九	二	澤瀉	澤瀉				
一八八	六	遠々世	遠々世	四二九	一〇	蹴	蹴	七二六			
二一四	三	思ヒタマウ歎クの	思ウタマウ歎クの	四三六	九	『平家物語』延慶本	『平家物語』延慶本				
二五八	八	傲慢	傲慢	五〇七	一	アチコチエ	アチコチエ	七二二	五	室町代	室町時代
二六五	六	(丁、ウ)	(上、二九丁、ウ)	五一七	八	會謂	會謂	七二八	二	代不明	時代不明
二七〇	七	條	條	五二六	五	スワヘ	スワヘ	七二八	四	病	病
二七〇	一	明らかならざりしが	明らかならざれど	五二八	一	スワヘ	スワヘ				

大正四年一月十七日印刷
大正四年一月二十日發行

疑問假名遣 後編 實例之部

定價金貳圓五拾錢

著者 文部省

發行者 株式會社 國定教科書共同販賣所

右代表者 大橋新太郎

印刷者 平井登

印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社分工場

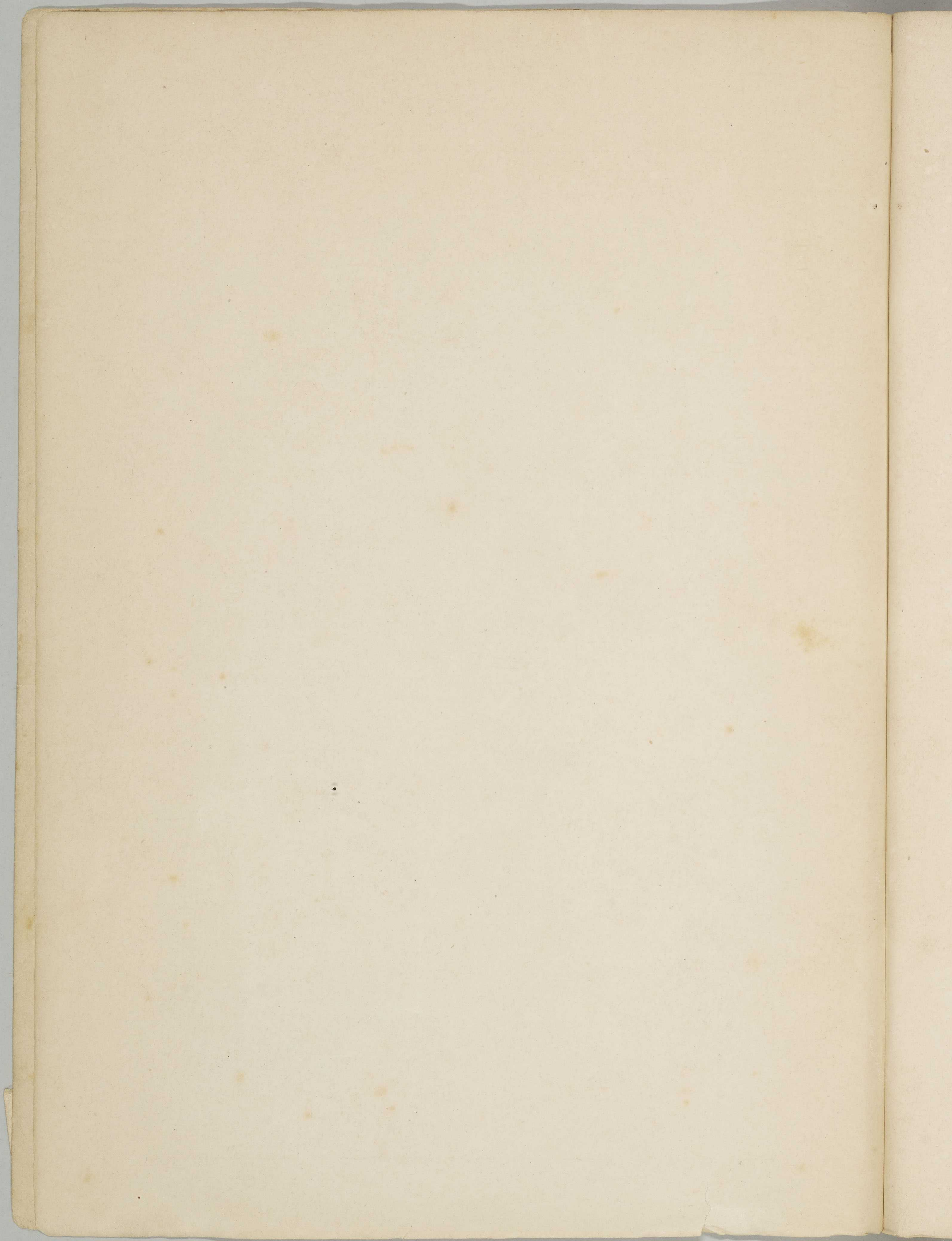
東京市日本橋區新右衛門町

株式會社 國定教科書共同販賣所



發行所

905.



AN-1:KN
~~1003.324.2~~
Ko.47.C
2

1246

国立国語研究所



1000606549

